

ゾラにおける青春の挫折

尾崎 和郎

まえがき

一九五〇年以来、ギー・ロペールをはじめ数多くのゾラ研究家が、『ルーゴン・マカール』叢書に新しい照明をあて、それまでの感情的で浅薄な、歪んだゾラ観を訂正してきた。ゾラのなかに実験小説や生理学や遺伝や社会的資料のみを見出し、そのみでゾラを解釈することは、もはや時代錯誤と無知を示す以外の何ものでもない。しかし、これらのゾラ研究家も、研究の正常な軌道をしいたとはいえ、旧来のゾラ観から完全に脱却しているわけではない。ゾラのなかに科学や社会学の決定的影響をみとめ、それを彼の拭いさがたい汚点とみなし、生理学や実験小説理論に毒されているにもかかわらず、なお、ゾラはすぐれた点を多分にもっている主張しているにすぎないからである。なるほど遺伝や社会学は思想家ゾラや文芸批評家ゾラにあつては無視できないものかも

しれないが、小説家ゾラのなかではさほど大きな場所を占めていないように思われるのである。

終始、批判と非難の的であつた生理学や実験小説理論をゾラから楽々と削りおとし、全く新しい視点からこの自然主義小説家の姿をてらしたしたのは、ゾラ研究に全く無縁な R・M・アルベレスである。アルベレスは『現代小説史 (Histoire du roman moderne)』(一九六二年)のなかで、廿世紀文学が、それまでの、いわゆる伝統的小説といかに異っているかを論述する際に、わずか二十ページの紙数をナチュラリスムにふりあてているにすぎないが、ゾラに関してきわめて暫新かつ卓抜な意見を表明している。彼はゲオルグ・ルカーチやミドルトン・マリなどの、伝統的な陳腐なレアリスム論におちいることなく、トルストイやハーディやゾラなどの自然主義小説家の作品のなかに、歴史小説や哲学小説や社会小説とは無関係な、「運命の交響曲——さまざまな人生やその過

失や幻滅などの交錯¹⁾を見出してつぎのように書いている。

「ゾラは『社会を科学的に描くのだと主張している。しかしゾラの社会学がわれわれの興味をひくには、社会学はあまりにも進歩している……ルーゴン・マカール家や、幼稚な科学的V理論である』社会の博物史Vは、ほとんどるにたらない問題である。ゾラはこの科学的V理論によって、彼をして人間やその運命を隈どらせた冷酷や憐憫を正当化したのだ。それは科学でなくて、人間にたいする激怒した愛情である……ゾラの社会は暗い海であり、ときに暗渠である。それを秘かに支えるものは、アルコール中毒や先天性梅毒や社会的不正義でなくて、これらの宿命を生きたための人々の忍耐強い、そしてまた過度な努力である……作品の響きよりもエコールのマニフェストを信用するとき、文学史は自然主義の射程を弱めることになるであろう。歴史的・文学的眞実はメダンの談話のなかにあるのではなくて、ゾラのなかの無意識の悲劇的感覚にあるのだ。」

アルベレスのいうこの悲劇的感覚、ないしペシミスムによって、ゾラはバルザック流のレアリスムをこえ、「自然主義的描写を宇宙的悲劇²⁾」にまでたかめたが、他の自然主義作家トルストイやハーディとちがって、ゾラのなかには自然主義的悲劇感覚のみでは解釈できない部分がある。それは『ルーゴン・マカール』叢書のいたるところにみられる露骨な描写である。ビヤン・パンサン (bien-pensant、正統派的な考えをもつ人) のひんしゆくをかい、アナトール・フランスをはじめ同時代

の多数の文学者を憤激させたこの種の描写は、作者の社会的ペシミスムと密接な関連をもち、「人間にたいする激怒した愛情」によってさええられてはいるものの、作者のスキャンダルへの要求と結びついていることはあきらかである。

スキャンダルへの要求といっても、むろん浅薄なものではないが、スキャンダルの文学、それが『ルーゴン・マカール』叢書の他の一つの特色であるように思われる。それではなにゆえゾラはこのようなスキャンダルの文学 (littérature scandaleuse) を書かなければならなかったのであろうか。この問いに答える一つの手段として、以下、わたしはゾラの青春時代の愛についてさぐりたいのである。作品と生活を直接に結びつけることは文学研究においては、もっとも安易で、しかも危険なことであり、またゾラの愛についての考え方や、娼婦ベルトとの同棲生活について、いかに克明にしらべあげても、それだけでゾラのメタフィジックが理解できるものではない。それゆえ、ここで検討することは、ゾラがなにゆえに好んで露骨な病的なものを書くに至ったかを確かめるための、きわめて間接的な資料にとどまる筈である。

1. ミシュレとサンド

十七、八才のころから二十一、二才のころまで、ゾラの頭を占めていた女性はいイズ・ソラリーであった。彼女はゾラが少年時代をすごしたエクス・アン・プロヴァンスの女性であり、彼の友人で後に彫刻家となるフィリップ・ソラリー

の妹である。

ゾラはバイユ宛ての手紙のなかで、「ぼくはS……を愛していませんでしたし、今もやはり愛していないようです。ぼくが愛するのは理想の人、『アエリエンヌ』であり、それは会った人というより、夢想の人なのです」と書いているが、ヘミングズが指摘するように、ゾラが三十才のとき、五年越しの恋人アレクサンドリーヌガブリエル・メレと結婚するのは、ルイーズがその年に死亡したためであるとするならば、ゾラはひそかに彼女を愛していたと推測されるし、一般に解釈されるように、『アエリエンヌ』とはほかならぬルイーズであるように思われる。なるほどルイーズは恋を語るにはまだあまりに幼く、ゾラがエクスを去ると、二人は手紙さえも交換せず、それゆえに、ゾラの言葉には偽りはないのである。しかし、ルイーズのおもかげは絶えず彼につきまとい、彼女を通して女性や愛について考え、そしてまた、彼女のイメージをもとにして「理想の人」アエリエンヌを描いたことは疑いえないところであろう。ゾラの青春について考える場合、彼の目に純情と無垢の化身と映じたルイーズ・ソラリーを無視することはできない。娼婦ベルトとの同棲生活の破綻も、原因はベルトの側にあるのではなく、ルイーズをもとにして作りあげた女性像を憧憬したゾラの側にあるように思えてならないのである。

一八五九年、十九才のとき、ゾラはパリで孤独であった。職業も友人もなく、絶望的な困窮のなかで生活していた。彼

の唯一の希望は詩を書くことであり、これが彼の絶望的な生活を支えていたが、それだけでは空虚であったのだろうか、暗澹たる生活から目をそらすことのできる夢のような恋をも望んでいた。彼の「やさしき鳩、愛らしき女性」にたいする憧憬には切実なものがあつた。この願望がエクスへのノスタルジーやルイーズへの慕情とまじりあい、やがて、ゾラの初期の作品において大きな役割を果たす『アエリエンヌ』という架空の女性が生みだされたのである。

「やさしき鳩、愛らしき女性」という言葉によってあらわされるゾラの女性像は、ミシュレの『愛』を読むことによつて一そう強固なものになった。ミシュレの『愛』は、とりたてて新しい観点から愛をとりあげているわけではなく、世の常の通俗的な愛情論を展開しているにすぎないが、ゾラは愛し、愛される喜びと意義を語つた書物にはじめて接し、それを愛の理想像と思いこんだのである。しかし、『愛』で描かれる愛情が主として夫婦の愛情であつたため、「夢においてしか愛したことがなく……愛されたことは夢のなかでさえもなかった」ゾラは、いくぶん失望せざるをえなかった。そこで彼は「夫婦」でなくて「恋人たち」の愛情について論じるために、「芽ばえた愛を描き、それを結婚にまで運ぶ計画をたてた」⁽³⁾。それは「ぼくがすべてを考えだし、すべてが唯一つの目的、愛することに集中すべき一種の詩となる」⁽⁴⁾。筈であつた。しかし、この計画は実現しなかった。それは愛について論ずるまえに、何よりも愛し、愛される経験をもちたかつた

からである。

當時のゾラの愛し、愛されたい気持ちにはかなり切実なものがあつたが、それが性に目ざめた少年の抱く通俗的な気持ちであつたことは、セザンヌやバイユに宛てたゾラのつぎの手紙が示している。

「ヒゲのはえた、たくましい君を、かよい、かわいらしい金髪の少女になぞらえたら、嘲笑っているのだと考えるかもしれません。しかし、それは唯一の可能な比較なのです。娘たちには修道院がたえがたく思われたり、夏の夜がおそろしく思われたりする年令があるものですが、男にもそのような年頃があるのです……おそらく君はそんな少女のように君のなかでうごめく、すべての愛欲をおさえつけようとしたにちがいありません……⁽¹⁰⁾愛さない人は死刑に処せられ、もつとも忠実な人に花が与えられるでしょう。各人がその伴侶を見出し、同数の男女が生まれるでしょう。未来の各カプルは群衆のなかで互いに認めあえるような同一のしるしをつけて生まれるでしょう。」⁽¹¹⁾

ミシュレに触発されて計画したゾラの『愛』は右のようなたわいない言葉のなかに消えてしまい、彼は思春期の精神的、肉体的欲望をみたす対象を待ちこがれるのみであつた。しかし、彼は毎朝窓の下を通りすぎる花売娘と微笑をかわすだけで満足するよりほかなかった。次第に彼はいらだててきた。そしてこの欲求不満は、生活の困窮や未来への不安とあいまって、他人にたいする反発や、愛の否定へとかわつていっ

た。

「恋人がぼくに口づけして永遠の愛をちかつても、ぼくは彼女が不実を働こうとしているのではないかと自問します……恋人がぼくのそばに居るとき、彼女の唇に耳をあて、彼女の呼吸に耳をかたむけても、彼女の呼吸がぼくに何も話さないもので、ぼくは絶望的になるのです。彼女の胸に顔をうずめ、彼女の胸の動きやにぶい鼓動を聞いているとき、愛という言葉の謎をとく鍵をみつけたように思うことがあるのですが、動いているのが泥土にすぎないと思うと、ぼくは絶望せざるをえないのです。それがぼくの孤独の真の原因なのです。」⁽¹²⁾

手のとどかないブドウをすっぱいというイソップのキツネのように、彼は合理化と批判反応によつて、欲求不満から逃れようとしている。

「美しい人はおそらくウソをつくでしょう。材料が美しくれば、それに生命をふきこむ息吹はそれだけ醜いものです。あんなにもやさしいあの大きな目がウソをつく。あのかわいらしい口がウソをつく。あの胸、あの神聖な輪郭、あの完璧な全体がウソをつく……決して、決して一つの魂をもう一つの魂に結合することはできないのです……腕のなかに恋人を抱き、体と唇をあわせ、二つの泥土をともにおのかせ、そして、たとえばくの心がおののいたとしても、彼女の心がぼくに答えているかどうかは決してわからないのです。ああ！なぜ、愛欲で息づまるその胸を開くことができないのですよ

う。そしてまた、なぜ、彼女の心の奥底までさぐり、彼女の心が愛の抱擁のなかで、ぼくを愛しているかどうかを確かめることができないのでしょうか。⁽⁹⁾

愛する対象を思うままにえられない不満をこうした言葉に表わしていたころ、ゾラはたまたまジュールジュ・サンドの作品をよむことによって新しい世界に目を開かれた。サンドにたいする称讃の言葉は、ラマルチーヌやユゴーやミユッセにたいするそれとともに、すでにエクスにいるところからたびたび耳にしていた。それゆえ、リセを出るとすぐに彼女の作品を読むつもりで、すでに彼は何冊か手に入れていた。そしてパリにやってきて読みはじめるや、すっかりサンドの世界に魅せられたのである。一八六〇年といえ、すでに詩の領域ではボードレールが『悪の華』によって、一方、散文の領域ではフロベールが『マダム・ボヴァリー』によって新しい世界をきりひらいており、十九世紀後半の文学はこの二人を先駆者として輝やかしく開花するのであるが、ゾラは新しい文学には無関心に、あいもかわらずロマン主義に心酔していたわけである。

サンドの作品にたいするゾラの文学的見解は他の場所ですべてとして、ゾラの心をもっとも強くとらえた作品は、未婚の男女の愛情をとり扱った『魔の沼』と『アンドレ』であった。「愛のすすり泣きも、悲しみのすすり泣きもなく、ただ静謐で、ほほえましい幸福があるばかりです。はげしい情熱が描かれているよりもずっと心を楽しませてくれます。愛情

と憐憫にみたまされ、静かで、軽快な心持ちになって書物をとじることが出来ます⁽¹⁵⁾」と書き、さらに『魔の沼』については、「何という逸品だろう！」とつけくわえているのであるが、彼がサンドの作品に魅せられた真の理由は、その作品に描かれている女性像に魅せられたからであり、それがゾラをして「女性を愛したい気持ちにさせ⁽¹⁷⁾」たからにはかならず、決して深い文学的共感を味わったからではなかった。

当時のゾラの解釈によれば、サンドの描く女性とは、「男が愛しすぎるといふ唯一の長所をもっているに反して、それほど情熱的でなく、それほど熱烈でないという長所をもっている⁽¹⁸⁾」。彼女の愛は男の愛によって徐々にかきたてられるが、彼女はつねに「より理性的で、より完全⁽¹⁹⁾」である。彼女は「男の弱さやエゴイズムや欠点⁽²⁰⁾」をおぎない、彼をささえて完璧な一組の愛を形づくりようと努力する。『アンドレ』のジュヌヴィエーヴはいつも弱気なアンドレをやさしく勇気づけ、「静かな海、香気のためよう青い地中海⁽²¹⁾」のような愛を成就するために、あらゆる痛苦をたえしのぶ。彼女はたえず彼をかばい、保護し、彼に生きる勇気を興えようとする。彼女は教鞭でしかもやさしい。暗い生活を送り、しばしば崩折れそうになっていたゾラに、ジュヌヴィエーヴが理想的な女性にみえたのも無理からぬことであった。『魔の沼』も同様で、十五才の少女マリーは、子供づれの男やめジェルマンを平静な愛で包む。彼女はつねに「より理性的⁽²²⁾」で、二人の幸福にたいする見通しにおいて彼よりの確である。ゾラは小

娘でありながら、心強さを感じさせるマリーに魅せられたわけである。

ところで、ゾラがサンドの作品を愛好した理由はこれにすぎるものではない。最大の理由はその猥褻性にある。なるほどサンドの作品には、一見したところ猥褻なものはないようにみえる。清潔そのものにみえる。しかし、二十年後にゾラが『ごった煮』のなかで、これほど感動を与えられた『アンドレ』を、人妻を誘惑するにもっともふさわしい小説として嘲弄するように、サンドの清潔さの裏には、淫蕩のものと恥すべき洗練と、みごとに装った卑猥とがかくされている。文学上の猥褻性は、單純に露骨であることのなかにあるのではない。二十才のゾラはそれに気づかないで、性的欲望をくすぐられながら、サンドのロマンチズムに文学的に感動していたのである。

實際、「魔の沼」のそばでジェルマンとマリーが野宿して一夜をあかすとき、彼の近くで無心に眠っているマリーは、まさしく「ロリータ」である。ゾラがひかれるのはマリーの官能的野性味によってであり、ゾラの感動のなかには性的なものがふくまれている。『アンドレ』についても同じことがいえるわけであるが、この作品の冒頭には、森の小川のそばにぬぎすてられている少女の靴を手にとって、少年アンドレが未知の少女に思いを馳せ、やるせない恋心をかきたてられる場面がある。この章は一見きわめてリリックで、牧歌的である。おそらくゾラは深く感動し、その感動を文学的傑作の

与える感動だと解釈したであろう。しかし、女の靴にふくまれる性的意義は明白である。それはフェティシズムであり、あきらかに性的刺戟と関連するものである。『危険な関係』についてジッドが語っているように、「快楽の感覚と恋愛感情のつながりは、決して宿命的なものでもなければ、全然自然なものでもない。△わたしたちの快楽のもとには恋愛だといふふらされていますが、恋愛なんてせいぜい口実に使われたにすぎないのです。▽ラクロがメルトウイユの口をかりていうこの短い句によって、人間の心のいわゆる△秘密▽のあるものは、実は簡単明瞭に説明されてしまうのだ」。(22)ゾラはサンドの作品のなかに恋愛の感情を読みとっていると思っていたが、実は快楽の感覚をくすぐられ、この官能のくすぐりを文学的感動による精神的昂揚と錯覚していたのである。

2. 娼婦ベルトとの邂逅

ゾラはサンドの愛の世界に心酔し、その理想的世界の実現を夢みていたが、間もなくその夢を永久に捨てさるなければならぬ時がやってきた。アンリ・ギユマンが「ベルト事件」と名づけ、ゾラ自身が「苛酷な愛の学校」(23)と呼ぶ娼婦との邂逅によって、「汚れた盃」(24)で快楽の濁酒を一気に飲みほさなければならなかったからである。

四年後の一八六五年に『クロードの告白』のなかで娼婦ベルトとの同棲生活を詳細に描くことになるが、ゾラがサンドの世界と決別して、『ルーゴン・マカール』叢書の世界に方

向轉換を行なうのは、この経験を契機としてであるように思われる。サンドの世界と対角線的に對蹠的な世界をのぞいたばかりか、その泥沼に一たび身をうずめたゾラは、ふたたびサンド的ロマンチズムの世界には帰れず、それを嫌悪と憎悪をもって眺めなければならなかった。

サンドの作品を愛好していたことから無理できるように元来ゾラは娼婦との接触を極度に嫌悪していた。彼は「おろかで、意地悪いやつ」のみが娼婦による「汚れを名誉とする」のだと考えていた。²⁶ 彼には欲望を満足する対象は彼と同じように純潔な少女でなければならなかった。「愛すること」を貪婪に求めている若ものたち」の接触のみが美しく、娼婦とひとたび接触した後は、純潔な少女との接触は罪惡とさえ思われた。²⁷ しかし、このような「愛の天使に遭遇する」望みは果たされず、ゾラは「疲労こんばい、絶望的な」状態にあったのである。²⁸

そんなある夜のこと、場末のうすぎたない彼のアパートで、隣室の女が発作をおこし、彼女を見守らなければならない破目になった。最初、部屋に入ったとき、彼女はひどく醜くみえたが、発作がおさまって静かに眠りこんでいる彼女の顔をじつと眺めている間に、彼はそこに「一種の優雅で、しかも苦い美しさ」を発見した。²⁹ そして、胸もとをあらわにして眠っている彼女の姿に次第に魅せられていった。彼は「目をそらすことができず、静かに起伏する乳房を眺め、その白さに眩惑されていた」。³⁰ 彼女が目ざめたときには、すでに彼は彼

女のそばに横たわっていた。彼は「よごれた盃で陶酔を飲みはしたのである」。³¹

この暗い記憶も、彼女がふたたび彼のまえにあらわれなかったら、次第に意識の底にとじこめられて消えてしまったかもしれない。そして、ふたたびサンドのロマンチズムに酔いしれていたかもしれない。しかし、ゾラの文学的生涯にとつて幸か不幸か、ある夜ベルトが食べものとベッドを求めてゾラの部屋にやってきた。彼女は代償を求めてやってきたようにみえた。ここにゾラの愚かしいばかり純情で単純な悩みがはじまる。金を払わないで彼女と関係をもったからには、彼女の要求を拒むことができないと彼は考えた。しかし、相応の代償を与えて追いかえすこともできなかった。「処女と娼婦とを区別し、一方を拒絶し、他方を迎える」ことが「罪深い」ことに思われたからである。一夜、彼女をもてあそび、翌朝にはその「汚れ」を忘れて、彼女から顔をそむけることは、彼には「卑劣なこと」にみえた。彼は「この単純で、明白で、明瞭な真実のまえで恐怖し」、だれ一人として悩むことのないこの問題について、きまじめにもあれこれと思ひやまなければならなかった。³² アフリカにおける娼婦とのはじめの接触によって性的に決定づけられたジッドのように——いうまでもなくジッドとは異った意味においては——ゾラもまた娼婦との最初の接触によって自己の存在の深部をかきまわされることになった。彼もまたジッドと同じように *scrupuleux* (良心的な、³³ 小心翼々たる) であった。

熟慮のすえ、ゾラは「この女にたいしても夢想の恋人にた
いしてなつたであらうものにならなければならないのだ」と
決心して彼女の求めに応じた。ここにゾラと娼婦ベルトとの
同棲生活がはじまるのだが、翌朝、彼のそばに眠っているベ
ルトの「平凡な、色あせた……しかも苦惱や絶望の異様な美
しささえもない顔をまえにしてふるえおのき」、はげしい
「懊惱」に心をしめつけられた。「それが憐憫からであれ、
正義感からであれ、淫蕩からであれ……この醜い年老いた娼
婦が彼の恋人であつた」からである。⁽³⁴⁾

しかし、同棲生活をはじめたからには彼女を愛する以外に
なかつた。それは義務でさえあつた。良心的な (scrupuleux
小心翼々たる) ゾラは愛情を装つた。そして、ベルト
への愛情とは、ベルトを娼婦の世界から救いだし、彼女を普
通の女にかえることであると考え、そのために、彼女の言葉
づかいや振るまいや仕ぐさをなおそうと心をくだいた。しか
し短期間で彼女を自分の望むような女にかえることはできな
かつた。その原因は真実の愛情によつて彼女に接していない
ことにあると考えなおし、心から愛する努力をかさねた。し
かし、やはり、彼女はもとのままであり、「彼女の声や動作
が侮蔑のように思われ、彼女の全体が傷つけるのであつた」⁽³⁵⁾
長い間、こうしてゾラはベルトを嫌悪しながら同棲生活をつ
づけていたが、そのうち次第に精神的にも肉体的にも彼女
に結びつけられていき、彼女のなかに美しさや若ささえ見出
すにいたつた。⁽³⁶⁾ 彼女は「宇宙であり、命であり、愛情であ

る」とさえ彼は書いているが、それは決して自己偽瞞でも自
己弁護でもなかつたであらう。すでに彼は自虐的な愛の段階
を乗り越えていた。誇りをすてて娼婦を愛しているのでもな
く、彼女の地点までさがつて泥沼のなかで生きているのでも
なかつた。娼婦の次元に身をおとし、そうすることによつて
すさみきつたベルトの魂を救済しようと考えたことは傲慢で
あつたと考えるようになっていた。彼が彼女に結びつけられ
ていたのは、ほかでもない男女間の不可思議なキヅナによつ
てであつた。

それゆえ、ベルトが他の男と關係をもちはじめると、ゾラ
は堪えがたい嫉妬にさいなまれた。憐憫と正義感と淫蕩から
追いつめられるようにして同棲生活に入つたにしろ、良心的
な (scrupuleux) 彼は最初から共同生活が要求する義務には
きわめて忠実であつた。心のうちで嫌悪してしていた時期に
おいてさえ、彼はそれをおしくして愛情を示した。しかも
「今や彼女を愛し、狂おしい愛で守っているのである」。⁽³⁸⁾ ゾ
ラにしてみれば、彼女の言動の一つ一つに傷ついた時期を乗
りこえ、ようやくにして離れがたい氣持にまでたどりつた
のである。彼のこの氣持と長期間の内心の葛藤には全く無関
心に、彼女が事もなく隣室の男に身をまかせたことは許しが
たいことであつた。彼の考え方はきわめて身勝手であつた
が、彼はそれに気づかないで、ベルトの不実な行為を確認し
た後、彼女をなじつた。怒つたゾラに泣きぬれながら彼女は
許しを乞うたが、心身ともに疲れきつていたゾラは、彼女と

の關係をうちきつたのである。

ベルトとの邂逅は、ギユマンのいうように「ゾラの運命に大きな影響」を与えた。³⁹これによって彼の青春が根こそぎ失われてしまったからである。

あれほど接触を怖れていた娼婦と、暗い欲望に引きずられて、なかば弱みにつけてこんで交わったことは、彼自身の責任とはいえ、ゾラには大きな打撃であった。みずから「恥ずべき泥の記憶」と呼ぶように、それは、ぬぐいさることのできない汚辱であった。もはや彼は「のろわれた思い出」を通してしか、アンジェリックな（天使的な）ルイズ・ソラリーの姿を想いえがくことができず、永遠に彼女への愛を放棄しなければならなかった。⁴⁰そしてまた、サンドやミシュレの描く愛にもはや無縁になった。清純な愛情物語にたいする彼の夢想には、いつもこの汚れた夜の思い出がつきまとう。『アンドレ』によつてかきたてられた愛の夢は、結局、娼婦ベルトの一夜でみたされなければならなかった。あれほどあこがれたサンド的愛とは、ゾラにあっては、娼婦との暗い接触以外の何ものでもなかった。それゆえ彼はすべての愛を彼自身の愛にまでひきさげなければならぬ。『ルーゴン・マカール』叢書のなかで描かれる愛欲シーンのほとんどすべてが、暗い光にいろどられているのも、おそらくこの夜の記憶と無関係ではない。たとえば、『居酒屋』のジェルヴェーズがクローポーの吐いたヘドのそばで先夫ランティエと愛欲をみ

たした後、皮膚のすりむけるほど体を洗うあの有名なシーンも、彼自身の経験した「のろわれた思い出」と意識下でつながっているように思われるのである。

しかしゾラはその文学的生涯において決定的である筈の最初の愛情のみたされ方を凝視して、自己や人間の深部をえぐりだす方向にはむかわない。それはこの記憶があまりによごれているため、つとめて忘れさるうとしていたからだとも解釈できようが、おそらくそれ以上に、彼がそこに人間性の暗さをみとめようとしないからである。彼はルメートルのいうような人間獣性のペシミストではない。彼は終始一貫、人間の悪の原因を社会制度や社会悪のなかに見出し、永遠の人間性を否定し、そうすることによって彼自身の責任を回避するのである。「のろわれた思い出」についてもつぎのように述べている。「誰の肩に頭をもたせかけるべきかとたずねるとき、世の父親たちは娘をかくし、われわれを路地の暗闇のなかに追いやってしまうのだ」と。⁴¹

このようないいのがれにもかかわらず、この一夜がゾラに暗い影響を与えたことは明白である。しかし、これだけではまだ決定的ではなかった。いかに彼が *scrupuleux* であったとはいえ、文学的影響を与えるには十分でなかったであろう。彼をして人間や社会の影の部分のみを凝視させ、光の世界と絶縁させるのは、ベルトとの一年有余の同棲生活である。それはまさしく闇と泥の生活であった。彼はその原因をベルトの娼婦的な言葉や振るまいやものの考え方のなかに求

め、彼女が言動をあらためれば、光りかがやく生活がはじまるものと信じていた。しかし、彼が嫌悪していたのは、単に彼女のなかの娼婦ではなく、その年老いた、醜い容貌をふくめた彼女の全体であった。かつて恋人として彼が夢みたのは、まだ成熟しきらない清楚なルイズであり、「光りかがやく純白の恋人」⁽⁴³⁾であった。サンドの牧歌に養われた彼は、「彼女がそよ風と朝露のなかに生まれる野の草であり、水草であり、永遠の清流が彼女の心と体を洗うことを望み、雪よりも白く、泉の水よりもすきとおり、純潔において空や海よりも深く広い処女しか愛さないと誓っていた」。その夢ははかなく消えて、彼の手にした「処女は、かつてそれに触れたら死ぬだろう」と思い、近寄ろうとさえしなかった汚れた女であった⁽⁴³⁾。

たとえ娼婦であろうと、せめてベルトが、「すばらしくて有害な肉体をもち……ただ女性としての魅力だけでずるずると男をひきつける美しきけだもの……バビロンのおとめたちが何かの日に拝んだ陽物のように、わいせつでしかも不易な存在である」ナナのような娼婦であつたら、彼は「人間の不潔な全体がわたしの眼前に横たわっていた」⁽⁴⁴⁾となげきはしなかったであろう。なるほどナナは、ゾラが作品のなかでくりかえし書いているように、「汚物にたかる金蝇」であり、ベルトと同じように、「おろかで、上品なところも暖い心もなく、意地悪でも善良でもない」女であるが、それをおぎなうにたる「△下町風のぼつてりした肢体Vをそなえた△地上の

ヴィーナスV」であつた⁽⁴⁶⁾。それにひきかえ、ベルトは性的魅力にも欠けた、嫌悪感のみを与える娼婦であつた。何ひとつとりえのない彼女にたいし、彼は一かけらの愛情ももっていない。「この女がいなくなったときの心の苦しみはどんなに大きいことだろう」と書いてはいるが、これはいわゆる男女間の愛情とは全くことなつたものであつた。彼がベルトに結びつけられていたのは、むしろ彼女にたいする嫌悪感によつてであつた。嫌悪感がすなわち彼女とのキズナである。彼女がたとえ嫌悪する対象であるとしても——というより、嫌悪する対象であるがゆえに、一そうゾラにとっては、この対象の欠けることが、精神的かつ肉体的空虚を意味するという奇怪な状態にあつたのである。

しかし、この嫌悪感の裏に奇妙な愛情がかくされていたことを見のがしてはならない。それはA・フランスのいう憐憫にもとづく愛情である。いかにベルトがきらわれるにふさわしい女であるにしろ、良心的な(scrupuleux)ゾラは彼女を徹頭徹尾、嫌悪しつづけることはできなかった。彼女を嫌悪せずにはいられないことを、彼はたえず罪深いことだと考えていたが、この罪悪感⁽⁴⁷⁾は憐憫の感情と表裏一体をなしていた。ベルトがすべての人に嘲弄され、もてあそばれるためにのみ生まれたばかりでなく、さらに今、同じ部屋で生活している彼自身からさえも嫌悪と侮蔑をもってしか迎えられないからこそ、彼は彼女にたいし深いあわれみを感じていた。彼は彼女を嫌悪しながら憐れみ、憐れみながら嫌悪し、その彼

自身を嫌悪し、憐れみ、罪深いと感じていた。要するに彼のなかには、すべてにおいて醜悪で、嫌悪感のみを与えるベルトにたいする怒りと憎しみ、そんな彼女にたいする憐れみと愛情、そしてまた、このような自分自身にたいする罪悪感と嫌悪感がうずまいていた。この混乱した感情はやがて整理されて「人間にたいする激怒した愛情」にかわり、後年『ルーゴン・マカール』叢書においてみごとに結実するのであるが、二十才のゾラにとっては、あかるい青春と遮断された、底知れぬ泥沼のなかをながき苦しむ闇の生活であった。彼が「わたしの青春は永久に死滅した」⁽⁴⁸⁾と慨嘆するのも当然のことである。

ひとたびベルトの世界に沈んだゾラには、青春や理想は無縁な世界のことに加え、彼の周囲には醜悪な世界が展開されているように思われた。醜悪な世界の印象はあまりに強烈であり、もはやそこから逃れることができなかった。しかも、年月のへだたりがこの汚辱の青春を美しくいろうることもなかった。『ミニ・パンソン』のミュッセのように、屋根裏部屋の不潔さや娼婦の醜悪さを美的に構築しなおすには、彼の青春はあまりに汚辱にみちていたし、その汚辱を「青春の八すばらしき愛欲V」とすりかえるには彼はあまりに誠実であった。『ミュッセのような作家や多くのペテン師たちは魔物を光で飾る……かれらは嘘つきだ!』というように、彼は汚辱を汚辱とみとめずにはいられなかった。ミュッセやサンドが「醜悪な現実」から目をそらし、現実をポエジーで装った

からこそ、ゾラはそれに眩惑されて青春を汚辱のなかに失わなければならなかった。「人間は二つの青春や二つの愛をもっていない」というように、ひとたび失った青春はとりかえしがたいものであった。

そこでゾラは、失われた青春の補償のために、ミュッセやサンドにたいする激烈な攻撃と苛烈な告発に向かった。彼はかれらが理想化し、美しく飾りたてたものの背後にかくされた、人間と社会の醜悪な部分を狂気のようにあばきたて、人間と社会の底にどんな汚物を激怒したようにあらあらしくかきまわす。こうして『ルーゴン・マカール』叢書は、挑発的で復讐的な色合いを帯び、スキャンダルをひきおこすことになった。「美と愛についての一切の姿を凌辱し、あらゆるよきもの、すぐれたものを否定するために、かつてこれほど努力をかさねた人間はいなかった。かつて人間はこれほどまでに人間の理想を無視したことはなかった」とアナトール・フランスがいうのも、ある意味では正しいことであった⁽⁴⁹⁾。たとえその底をヒューマンな熱い感情が流れているにせよ、そしてまた、「人間にたいする激怒した愛」によって支えられているにせよ、『ルーゴン・マカール』叢書は多かれ少かれこのような意図のもとに書かれているからである。わたしが『ルーゴン・マカール』叢書をスキャンダルの文学、あるいは挑発の文学と呼ぶのはこの意味においてであるが、スキャンダルの文学がかならずしも劣悪な文学でないことは『サンクチュアリ』のフォークナーが証明しているところである。

註:—

- (1) R.—M. Albérès, *Histoire du roman moderne*, Albin Michel 1962. p. 56
- (2) *Ibid.*, pp. 58, 59 et 67.
- (3) *Ibid.*, p. 74.
- (4) Emile Zola, *Correspondance—Lettres de jeunesse*, Charpentier, p. 135 (Lettre à Baile, le 10 août 1860)
- (5) F. W. J. Hemmings, "Emile Zola et Louise Solari", *Revue d'Histoire Littéraire de la France*, janvier-mars 1960.
- (6) Zola, *Correspondance*, p. 188 (Lettre à Cézanne, le 30 décembre 1859).
- (7) *Ibid.*
- (8) *Ibid.*
- (9) *Ibid.*
- (10) *Ibid.* p. 150. (Lettre à Baile, le 31 octobre 1860).
- (11) *Ibid.*, p. 195. (Lettre à Cézanne, le 16 janvier 1860).
- (12) *Ibid.*, p. 25. (Lettre à Baile, le 17 mars 1860).
- (13) *Ibid.*, p. 25.
- (14) *Ibid.*, p. 26. (Lettre à Baile, le 17 mars 1860).
- (15) *Ibid.*, p. 35. (Lettre à Baile, le 2 mai 1860).
- (16) *Ibid.*, p. 35.
- (17) *Ibid.*, p. 36.
- (18) *Ibid.*, p. 36.
- (19) *Ibid.*, p. 36.

- (20) *Ibid.*, p. 36.
 - (21) *Ibid.*, p. 37.
 - (22) マン・ユン・シイ『芸術論』(河上徹太郎訳)——フランスの十大小説、斎藤書店、一九四七年、一一一ページ。
 - (23) Henri Guillemin, *Zola, légende ou vérité?*, Julliard, 1960, p. 14.
 - (24) Zola, *Correspondance*, p. 258. (Lettre à Cézanne, le 5 février 1861)
 - (25) Zola, *La Confession de Claude*, Fasquelle, 1961, p. 43.
 - (26) *Ibid.*, p. 46.
 - (27) *Ibid.*, p. 45.
 - (28) *Ibid.*, p. 46.
 - (29) *Ibid.*, p. 41.
 - (30) *Ibid.*, p. 42.
 - (31) *Ibid.*, p. 43.
 - (32) *Ibid.*, p. 54.
 - (33) シャン・ユン『シイの青春Ⅱ』(吉倉鏡光・尾崎和郎共訳)『みすず書房』一九五九年、二六九—三三三ページ(天使的愛[マンシエリスム]について。マンシエリスムの裏面)参照。
- scrupuleux (良心的な・小心冀々たる) という語は、ラテン語 scrupulus (小石) にその語源をもち「つねに決断が悪く、決心がつかず、小石 (scrupulus) ひとついかなれ、痛みでこちららへつ」この状態を示す。『シイの青春Ⅰ』一〇六ページ参照。
- La Confession de Claude, pp. 54—55.

- (35) *Ibid.*, p. 65.
- (36) *Ibid.*, pp. 118—129 (Chapitre XXI).
- (37) *Ibid.*, p. 106.
- (38) *Ibid.*, p. 156.
- (39) Zola, *op. cit.*, p. 18.
- (40) *La Confession de Claude*, p. 44.
- (41) *Ibid.*, p. 45.
- (42) *Ibid.*, p. 104.
- (43) *Ibid.*, p. 103.
- (44) Jules Lemaitre, "Emile Zola," *Les Contemporains, études et portraits littéraires*, première série, pp. 255—256.
- (45) Ct. H. Guillemin, *Zola*, p. 18.
- (46) *Les Contemporains*, p. 255.
- (47) *La Confession de Claude*, p. 168.
- (48) *Ibid.*, p. 104.
- (49) H. Guillemin, *Zola*, p. 19.
- (50) *La Confession de Claude*, p. 190.
- (51) Anatole France, *La Vie Littéraire*, I, Calmann-Lévy, 1926, p. 236.